

言語コース	テーマ	言語コース	テーマ
インドネシア語	自国の誇れること	中国語	学校
韓国語	食文化とマナー	ベトナム語	都市伝説
タイ語	音楽	ロシア語	祝日

②の単語・表現リストは、インタビューやプレゼンテーションで使ったり相手から聞いたりすると思われる単語・表現をあらかじめ予想し、リストアップしておくものである。KANTO 生は、それぞれ辞書を駆使して 3 言語対応のリストを作成した。③では、実際のインタビュー時に質問する項目を決め、英文を作成した。最終回(交流会前日)には、各言語コースの生徒が 2 回のインタビュー活動でどの言語を母語とする APU 生にインタビューをするかを決めた。組み合わせは以下のとおりである。

KANTO生の言語コース (テーマ)	APU生の母語 インタビュー①	APU生の母語 インタビュー②
インドネシア語 (自国の誇れること)	中国語	タイ語
韓国語 (食文化とマナー)	ベトナム語	インドネシア語
タイ語 (音楽)	韓国語	ロシア語
中国語 (学校)	インドネシア語	ベトナム語
ベトナム語 (都市伝説)	ロシア語	中国語
ロシア語 (祝日)	タイ語	韓国語

3.3 ワークショップに関する考察

ワークショップを終えてあらためて思うことは、KANTO と APU の高大連携企画であるからこそ実現できたイベントであったということである。双方の共通点は、ローカルで多様な言語文化のもとにグローバルな社会が成り立っていることを、個々の言語文化を具体的に可視化する教育を通して縮図的に学習者に示している点である。今回の交流

会も、人やことばが越境するグローバル社会のコミュニケーションを、ローカルな視点をもって具体化したイベントであったといえよう。

それぞれの言語コースの生徒は、時に言葉に詰まって日本語を交えながらも、アジア諸地域の文化に関するテーマに沿って英語でインタビューを行ない、近隣語でディスカッションしながら結果をまとめ、両言語で成果発表をした。APU 生も英語、自分の母語、日本語を駆使してサポートに当たってくれた。それぞれの生徒が、習熟度の差こそあれ、複言語を個々人の中に持ち、必要に応じて 3 言語を使い分けながらコミュニケーションをはかったのである。「外国語＝英語」という偏った言語観を植えつけてしまいがちな英語一辺倒の外国語教育では、このような柔軟な言語使用をする学習者を育てることは難しいかもしれない。お互いの母語が通じないときに「補助語」として機能する英語は、母語の干渉を受けた英語変種でよいのであり、この考え方は、複言語主義の言語観と軌を一にするものである。本稿では詳細を述べることはしないが、言語文化交流会後、11 月に 2 泊 3 日で開催したイングリッシュキャンプも、この複言語主義にもとづく「国際英語」教育に立脚したものであった。

3.4 事後アンケート

ワークショップ終了後に、KANTO 生(全参加者 29 名)に対してアンケートをとった。以下、その結果をまとめたものである(数字は回答者数)。

①事前用意していたことは、どのくらい役に立ちましたか。

- | | |
|------------------|-----------------|
| ア. 大変役に立った:12 | イ. ある程度役に立った:12 |
| ウ. あまり役に立たなかった:3 | エ. 役に立たなかった:2 |

②①の理由を書いてください。

【ア・イの理由】

- ・質問の答えが想定できたから。
- ・スムーズにプレゼンのまとめができたから。
- ・単語を理解していても文の中でわからなくなるものがあった。
- ・単語を調べていたのでスムーズに話せたし、相手の答えを聞き取ることができた。
- ・質問をたくさん作っていたのがよかった。
- ・応用力を試すことができた。

- ・ジェスチャーも加えればなんとか伝えられるとわかったから。
- ・沈黙にならずに続けて質問することができたから。
- ・相手の言うことが完全には理解できなかった。
- ・単語を必死に伝えたらわかってくれたから。
- ・調べた単語はわかったけど、それ以外はわからなかった。

【ウ・エの理由】

- ・前もって勉強していなかったから。
- ・質問の用意が足りなかった。
- ・少し想定外のことが起きたため。

③英語と近隣語で、どちらがより自分の言いたいことを表現できましたか。

(複数回答者あり)

- ・アジア諸語:11(インドネシア 2、韓国 3、タイ 2、ベトナム 2、ロシア 2)
※本交流会では、中国語による会話はなし。
- ・英語:20

④近隣語の母語話者と、英語の母語話者とでは、英語で会話をするときにどちらが話しやすいと感じますか。いずれかに○をしてください。

ア 近隣語の母語話者:9

イ 英語の母語話者:5

ウ どちらも変わらない:15

⑤④の理由を書いてください。

ア・発音が聞き取りやすいから。

- ・親しみやすい。
- ・伝えようとする気持ちが英語圏の人より強い感じがした。
- ・外国語として勉強している人が多いので話すのがゆっくりだった。
- ・英語でわからないところはタイ語を混ぜて説明してくれたから。

イ・授業で慣れ親しんでいるから。

- ・それぞれクセがあるから。

ウ・違いがわからない

- ・英語を母語としないもの同士通じる部分もあるが、母語話者だからこそこちらの意図を汲み取ってくれるという面もあると思う。

⑥自分の予想していたコミュニケーションはどの程度達成できましたか。

- ・まったく／ほとんど達成できなかった 7
- ・少しだけできた 2
- ・まあまあ・半分程度できた 11
- ・半分以上・かなりできた 7

⑦今日の経験を今後の言語学習にどのように活かしていきますか。

- ・初めて知った言葉があるので授業などで使いたい。
- ・近隣語の単語を覚えるとき英単語も覚える。
- ・ボキャブラリーを増やしたい。
- ・基礎をしっかり固めなければいけない。
- ・いろいろな人と積極的に話す。
- ・ネイティブスピーカーと話すときにいかしたい。
- ・わからないことを質問しながら両言語とも勉強したい。
- ・思ったことを話せなかったむずがゆさをなくすために両言語ともがんばりたい。
- ・対応力が足りないと思った。今学んでいる言語以外の人とも交流したい。
- ・ボキャコン(ボキャブラリーコンテスト)をがんばりたい。

ごく簡単なアンケートであるが、若干の考察を試みたい。①・②を見ると、事前学習が役に立ったという答えの理由には、質問文や単語リストを作ったおかげで、よりコミュニケーションを円滑にはかることができたというものが多かった。事前学習が役に立たなかったという答えの理由としては、準備不足ないし使用する語彙や表現の予想のずれが挙げられた。使用する単語や質問事項などはあらかじめある程度の予想ができるため、やはり念入りに事前学習をすることはこうした交流会の成功に不可欠といえるだろう。③に関しては、今回は中国語の会話がなかったため、中国語コースの生徒はすべて「英語」を選んでおり、回答数の信憑性はないが、他 5 言語のコースで、英語よりも近隣語のほうが言いたいことが表現できたと答えた割合は、インドネシア語:2/5、韓国語:3/4、タイ語:2/5、ベトナム語:2/4、ロシア語:2/6 となった。分母が少ないことの問題はあるものの、英語よりも韓国語のほうが表現しやすいという回答が目立った。日ごろより、韓国

語コースの多くの生徒は、サブカルチャー(K-POP など)の影響で他言語に比べて学習のモチベーションが高いとの印象がある。さらに日本語との言語的距離の近さもあってか、英語よりも韓国語のほうがはるかに熟達している生徒も少なくないため、このような結果になったものと考えられる。

④では、会話のしやすさに関して英語母語話者よりも近隣語母語話者を選んだ生徒がやや多かった。⑤ではその理由を問うた。「親しみやすい」という理由で近隣語母語話者を選んだ生徒がいる一方で、「授業で慣れ親しんでいるから」ということで英語母語話者を選んだ生徒もいた。今日の世界における英語の使用状況を考慮に入れれば、アジアやその他の地域からの ALT の招致や、音声教材のスピーカーの多様化など、英語教育のなかで母語話者以外の英語に慣れ親しむことが必要ではないだろうか。

⑥では、コミュニケーションの達成度を問うた。「まあまあ・半分程度」、「半分以上・かなりできた」との回答が比較的多かったが、「まったく／ほとんど達成できなかった」も 7 回答あったことは、問題視せねばならない。

⑦では、さまざまな声を聞くことができた。とりわけ語彙力や基礎の強化の必要性を書いた生徒が多かったようである。この感想が今後一層の学習意欲に結びつくことを期待したい。語彙に関しては、日ごろの学習もさることながら、やはり使用が予想される単語リストを事前学習会でしっかりと作成することが大事であろう。全体的には、「両言語ともがんばりたい」、「積極的に話したい」など、前向きな答えが多く見られたことが、今回の交流会の成功を意味しているのではないだろうか。

3.5 2泊3日のイングリッシュキャンプへ

ここでは、言語文化交流会の約 5 か月後に開催した APU(大分県別府市)でのイングリッシュキャンプの概要をごく簡潔に述べたい。参加者は近隣各コース 2 年生 19 名、研修の主な内容は、世界各地からの留学生に対して英語でインタビューをし、その結果をまとめて成果発表のプレゼンテーションをするというものである。全グループ共通のテーマは「幸福の条件」で、「あなたの幸福の条件を 3 つ挙げて、その理由を教えてください。」というものであった。2 泊 3 日のうち、初日はインタビューシート作成、2 日目はキャンパス内でインタビュー活動およびデータ分析と発表準備、3 日目はプレゼンテーションを行なった。研修の目的は、①普段学習している英語の実践的に使用することで、英語技能を向上させ、自立的学習のきっかけをつくること、②さまざまな文化的背景の英語話者とふれあい、豊かな言語文化観を身につけることの 2 点とした。ここでい

う英語とは、必ずしも音声教材に吹き込まれているような母語話者の英語ばかりではない。世界のさまざまな国や地域で使用されるバラエティに富んだ「国際英語」である。世界ではさまざまな英語が話されているという事実を知り、自分も多様な英語話者の 1 人であると認識することで、生徒の英語に対する垣根が低くなり、それが自信とさらなる学習意欲の向上へつながることを願って研修を実施した。

3.6 なぜ「インタビュー＋プレゼンテーション」なのか

本稿で述べてきた APU やその他の学生との交流会は、インタビューとプレゼンテーションを主たる活動内容としているものばかりである。筆者がとりわけ英語教育においてインタビューとプレゼンテーションにこだわるわけは、この 2 つの活動を通じて、いわゆるグローバル社会を生き抜くために必要なさまざまな力を育成することができるからである。図 1 は、「インタビュー＋プレゼンテーション」活動が育成する力、あるいは必要とする力を示している。

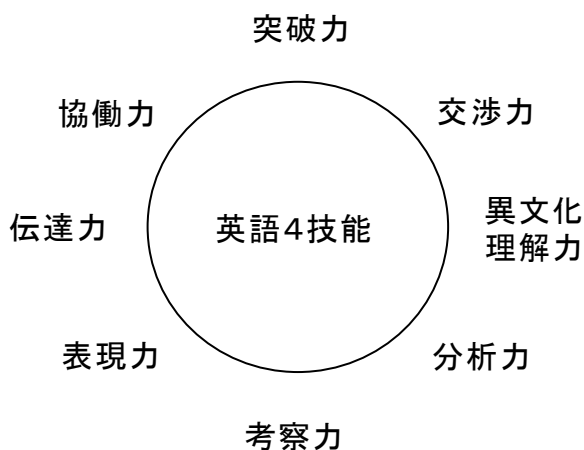


図 1 「インタビュー＋プレゼンテーション」活動が育成する力

「インタビュー＋プレゼンテーション」は、英語の基本的な 4 技能のすべてを要する。それと同時に、この基本的英語技能を中心に据えて、図の周辺にある 8 つの力が育成されると考えられる。学習者が英語で外国人に話しかけると、精神的にも身体的に

も少なからぬ緊張や萎縮が生じるだろう。インタビュー活動では、その状況からの「突破力」、平易に言えば「度胸」のようなものが育成されるだろう。次に、インタビューを仕掛ける相手が快く応じてくれるような「交渉力」が必要である。そして、さまざまな文化的背景の人々にインタビューする経験を通じて「異文化理解力」が涵養される。インタビュー後には、データ分析の際に「分析力」が養われ、分析結果から「なぜそのような結果になったのか」を考える「考察力」が身につく。プレゼンテーションの段階になれば、発表のための英語による「表現力」が必要となり、聞き手にわかりやすく伝えるための「伝達力」が必要となる。これら一連の活動をグループで行なうため、全体を通して「協働力」が育成されるのである。

4. おわりに

以上、APUとの高大連携による言語文化交流会を中心に、KANTOのトライリンガル教育の報告をした。KANTOでは、APUとの連携により座学にとどまらず複数の言語を実際に使用するという体験的な学びを提供できるようになった。今後はより多くの実践の場を生徒たちに提供するとともに、特に高学年には、本教育の立脚点である複言語主義にもとづく「国際英語+1言語」教育の理念を伝えることも必要だろう。言語教育において、豊かな言語観の育成はきわめて重要なテーマである。外国語教育は、実用面の向上のみならず、ことばについて深く考える人間の育成をも目指すべきである。今後はそのような教育の成果として、生徒の言語観の変化に関する報告もしていきたい。

(関東国際高等学校)

参考文献

- 橘広司(2014)「英語教育における EIAL および〈日本英語〉の 4 つの意義—英語教育政策提言への異論として」『日英言語文化研究』第 4 号 日英言語文化学会. pp. 1-12.
- 西山教行(2011)「外国語教育と複言語主義」『外国語教育フォーラム』Volume 5. 金沢大学外国語教育研究センター.

A Report on EIAL + 1 Workshops Based on Plurilingualism

Hiroshi TACHIBANA

The purpose of this paper is to report the workshops Kanto International Senior High School held in 2015. The report is made mainly focusing on *the APU & KANTO English + Asian Language Workshop* where students interviewed APU students and gave presentations using both English and Asian languages. In this paper, effects of this *interview & presentation approach* on foreign language learners are presented from the viewpoint of the education of globally minded leaders of the future. This consideration is made from the standpoints of EIAL, or English as an International Auxiliary Language as well as plurilingualism.